歴史の作られ方語られ方—横井時冬のこと

森　仁史

引き続き本号でもかねての宿題にひとまず決着をつけることで責めをふさぎたい。我々は日本の近代美術に関心を持ち、一方で作品の鑑賞によって新しい発見を求めているし、他方で先人の言説に学ぶことで目に触れえぬ事象について学ぼうとしている。後者には様々な美術史叙述が挙げられるが、我々の間でも頻繁に参照されるものは割と限られているように思う。記憶され続けるものと忘れ去られるものがあり、小生が本誌第七号で触れた明治三十一年刊行の『校本日本帝国美術略史』が不滅の官製美術史とするなら、興亡極まりない民間の美術史はどうであろうか。それらの評価の動きをひとまず我らが先達がつけた値段から窺うことから始めてみよう。

書　名	昭和二年	昭和十一年	昨　今
『日本帝国美術略史』	五〇円	一五円	三〇〇〇
兼松亀吉郎『日本画沿革史』	三円	八〇銭	三〇〇〇
藤岡作太郎『近世絵画史』	四円五〇銭	一円三〇銭	二〇〇
横井時冬『日本工業史』	一三円	八〇銭	一五〇〇
福地又一『美術年契』	五円	一円六〇銭	九〇〇

今も復刻が入手できる藤岡作太郎著『近世絵画史』（金港堂書籍、明治三十六年）はその手堅い叙述でよく知られている。その翌年、兼松亀吉郎『日本画沿革史』（東陽堂支店）という一書が出版されていが、今では殆ど言及されることのない書物である。著者は名古屋の生まれで、同志社を経て郷里で女学校や中学校の教師を務めたたが、後画家に転じ、菅原白龍、川崎千虎に就いたようである。藤岡が国文学研究の必要から絵画の歴史を研究したのに対して、兼松は画家としての各流派の研鑽を経て、この後の日本画界の発展に寄与しようとしたのであった。

同様に画家の立場からの著述としては久保田米僊の『画法大意』（博文舘、明治二十七年）がある。こちらは画を学ぼうとするものへの入門書として書かれたが、「絵画の起源、絵画の沿革」にもかなりページを割いていて、知識の羅列ではなく歴史としての展開を意識した記述となっている。これに対して兼松は自著の緒言の殆どを費やして、日本の地形風土の「明媚清麗」が上質な絵画を生む理由だとして、ひどく『略史』と似通った環境決定論を振りかざしている。また、各章の冒頭を各時代の美術の概論から始めて、これも略史と同じ構成でその直截な影響が認められる。ただし、書名の日本画は岡倉流の概念ではなく日本に生まれた絵画の意味で記述しており、上代から幕末まで時代と流派ごとに記述している。そのなかには、浮世絵や西洋油彩画にかなりのスペースが割かれている。彼に美術史の著述を勧めたのが序を寄せた横井時冬であった。

横井もこれに先立つ明治三十四年に『日本絵画史』を藤岡と同じ金港堂書籍から上梓している。金港堂は装幀に凝った出版社で、藤岡の場合は表紙の和紙に多くの雅印を型押ししていたし、横井の場合は葦手模様をクロスに型押ししている。いずれも伝統的な絵画趣味をきわめて濃厚に漂わせている。横井も絵画史を上古から明治まで通史的に叙述しているが、江戸期は流派ごとに分けて記述している。維新後の絵画では先ず東京美術学校の設立から同時代に至る日本画を追って記述した。特筆すべきは西洋画の記述で、幕末の開成所から工部美術学校、明治美術会までの連綿を丁寧に記述していて、こうした道筋と意義を語った最初の記述のように思う。横井は『本朝画史』など近世までの著述を「皆画伝にして、歴史体に絵画の発達を説明したるものなし」と批判して、これまでの歴史を意識しない著作と自己の立場とを峻別しようとしている。

藤岡が今も忘れ去られず復刻（創元社、昭和十六年・二十一年。ぺりか

ん社、昭和五十八年）を重ねたのに対して、横井や兼松の絵画史が忘れ去られたのには、記述された情報量の差が大きいだろう。横井、兼松は明治後半に歴史として絵画の流れを語ることに新基軸があったのだが、戦後は研究の進展によってたやすく乗り越えられてしまった。また、岡倉覚三退場後は洋画が社会的に復権することができ、大勢は公正な評価が進むようになる。

横井の他の著作を見渡すと、著した分野は庭園史、商業史、工芸史、日本史、音楽史に及んでいる。このなかでは、今も参照されるのはまず工芸史であろう。著作としては『工芸鏡』（六合舘書店、明治二十七年）と『日本工業史』（吉川半七、明治三〇年）とであり、前者は昭和七年に再版され、昭和五十五年に復刻された。後者は高等商業学校三年生参考書として出版され、同年一般書としても刊行された。明治三十五年に補訂三版、昭和二年に改造文庫、同年『横井時冬全集』（白揚社）の一巻となり、昭和五十二年には文庫が、五十七年には全集版が復刻された。この後者は日本の上古から明治二十年代末までの製造業全般にわたって通史的な展開と業種別の技術的進展をかなり細かな地域的情報を交えて叙述している。また、『日本工業史』には陶磁器、織物などのほかに燐寸、花筵など当時の花形産業や製紙、印刷術までが含まれ、とくに明治以降の技術革新が詳述されている。ここにおいても、名人伝や伝承譚ではなく、その産業の成立と対外的影響関係や技法的進歩を満遍なく記述している点で近世までに流布した物産誌を超克しようとしている。この執筆時期に横井が参照しえたのは近世までの著作だけでなく、明治になって制作に集成された公文書があった。これらを歴史として再編し、近代的歴史観に基づいて通観できるよう各分野の通史的把握の求めに応えようとした。そのための幅広い史料渉猟が横井の著作の基礎となり、学問的意義となっていた。こうしてこれらが長く利用され記憶されることになった。なぜかと言うと、伝統技法による製品製造が支配的であった明治期までの日本の工業の記述はそのまま現在言うところの美術工芸から工業デザインまでの主要な部分を語ることになったし、明治人にとっての重要性に基づいて判断され選択された情報が編まれている。従って、ここに盛られた記述内容はそれ以後の研究者にとってタイムカプセルの如く明治までの姿を留める記録として貴重となったのだ。

これらが横井の東京高等商業学校での教育のためのいわば義務的必要から生まれた研究であったのに対して、庭園は彼個人の嗜好のひとつであった。造園は近世社会では大名のお抱え庭師の独占するところであり、これが初めて学的研究の対象とできたのは幕藩体制の崩壊した明治維新以降であった。そのときには西欧的な作庭技法の流入という刺戟と官僚や商人という新たな施主が現れた。そこで、本多錦吉郎『図解造庭法』（団々社、明治二十三年。六合舘、大正十五年。林平書店、昭和一〇年）、『明治園芸史』（日本園芸研究会　大正四年、有明書房　一九七五年）などという著作が可能となり、需要があったのだ。横井の『園芸考』（大八洲学会、明治二十二年）はこれらのなかでは早い時期に属し、昭和十五年に日本文化名著選第十三編として『日本庭園発達史』（創元社）と題して復刻された。ここに前田家蔵の「山水并野形図」と「作邸記」とが付載された。青木同人が盛んに気にしている時代に、明治の意気込みから生まれた著作が日本文化の独自性誇示に一役買うというのはどんな巡り合わせだろうか。（ここには西堀一三が「横井時冬博士」という小伝を寄せている。）横井は柳域もしくは芸窓と号し、後者は小杉温邨に贈られた芸（クサノコウ）の盆を愛でて繁殖させ、書斎の窓近くにも植えたことによる。横井は書画、陶磁器、細工物以上に盆栽、花卉を愛する人であったようだ。これは近世的な教養世界で育まれた文人の嗜む領域がこうした範囲に広がることを示しているが、我らが身を置く貧相な戦後文化とはいささか趣を異にするように思える。

『芸窓襍載』（明治書院、明治三十七年）によれば、横井家は北條時行を祖として、建武以降海東郡横井村に住み、後に赤目、藤瀬、祖父江の三家に分かれて関ヶ原の役以降皆名古屋藩に仕えた。時冬は祖父江横井家の出身で、ここは横井作左衛門時久以来、名古屋西北の中島郡祖父江村に在住

し鷹匠頭として仕えていた。寛永の頃、横井時久は隼を訓練して狩猟する竿鷹という独特の技法を編み出した人物と伝えられ、この後代々三百石程度を給される鷹匠であった。時冬の父時相までその地位を継ぎ、彼はその三男であった。分家に宝暦頃の横井千秋という本居宣長の門人が出て、永楽屋に「古事記伝」「古今集遠鏡」の板刻を命じた。自身にも若干の著作があったようであり、『横井千秋全歌集』（和泉書院、一九九二年）が編まれている。本家はどちらかというと学問に親しむ家ではなく、むしろ、藤瀬横井家には寛保頃に也有の号を持つ時般があり、和漢に通じた文人として知られている。「蘿窓集」ほか詩歌集や「小皮籠」などのエッセイ集も知られ、『也有全集』（博文館、明治三十一年）が編纂されている。

時冬は安政六年名古屋の生まれで、五歳で父を、十一歳で母をなくし、祖父江の地に移り住み千秋の後裔に学問の手ほどきを受けた。慶応三年から明治三年まで名古屋藩明倫堂、次いで佐藤楚材、角田春策に漢学を学んだ。八―九年愛知県養成学校上等師範科に学び、十七年上京して十九年には東京専門学校法律科を卒業、二十年英学科も卒業した。この頃、小杉温邨を訪ね師事している。二十年に東京控訴院公証人試験に及第し、翌年から東京高等商業学校に奉職し、この年文部省より内国商業史取調係に任ぜられた。二十三年に助教授、二十八年には教授となった。三十一年農商務省工業誌編纂材料を嘱託され、三十二年東京高等工業学校より工業図案科調査を委嘱され授業も担当した。三十五年五月文部大臣より文学博士の学位を授与され、翌年第五回内国勧業博覧会審査官を委嘱された。三十八年国書刊行会が設立され、小杉温邨とともに『続々群書類従』のうち書画類、金石文類、園庭類、茶香類の編纂に従事した。この翌年、明治三十九年二月に病床に臥し、あえなくも四月十九日四十九歳にして没した。『日本商業史』改造文庫版に収められた小杉の「横井時冬君小伝」は愛借おくあたわざる情愛に満ちた追悼文となっており、万感に迫るものがある。この小文はいささかそれに煽られ気味なのである。

絵葉書三昧4・アール・ヌーヴォから アール・デコの絵葉書たち その壱

山田　俊幸

大阪の本屋さんでアール・ヌーヴォから、アール・デコまでの絵葉書の展示をするので、ちょっとアイディアを貸してほしいと言う。絵葉書人気も高まり、会員の絵葉書関係の本も増え、ボストンの展覧会の国内巡回も始まった。絵葉書会もいよいよ本格的になりつつある大事なときだけに、大阪地区でのこうした小展覧会の申し込みはありがたかった。好いも悪いも、できるかぎりのことはしましょうということになって、基盤になる展示品（即売会だが、多少の非売品を置くことになった）と、参考になればと絵葉書についての多少のコメントをメモ書きすることとなった。この原稿はそのメモ書きが下地になったものだ。

絵葉書展示の協力を申し出てくれたのは、大阪阪急古書のまちの「りーち」。大阪の絵葉書会の事務局もしてくれている本屋さんである。期間は十月二十一日から十一月二日。きっとこの『一寸』の出るときには展示会も終わっているだろうが、こんな催しもあったという記録に、ここに載せてもらおうと思う。

今回、「アール・ヌーヴォからアール・デコの絵葉書たち」という課題をもらって、一応の歴史展示をするために、

アール・ヌーヴォ／和様デザイン／ゼツェッション、未来派

アール・デコ／モダン・スタイル

という、五つのセクションを考えてみた。「和様デザイン」というのは、アール・ヌーヴォに組み込んでもいいのだが、アール・ヌーヴォという外来のジャポニスムではなく、内（つまり、日本）から意識的に展開した新興ジ

一寸

第二十号　二〇〇四年十一月

第二十号目次

新・旧刊案内20　昭和十九年の木村仙秀（承前）　青木　茂　1
「新版画」用語考　岩切信一郎　10
そして《赤陽》が生まれる　大谷　芳久　14
小山正太郎研究拾遺（三）　妙義山　金子　一夫　22
弄蘭荘酔眼記　丹尾　安典　26
江戸の銅版画帖から　銅・石版画遺聞18　森　登　29
歴史の作られ方語られ方—横井時冬のこと　森　仁史　34
絵葉書三昧4・アール・ヌーヴォからアール・デコの絵葉書たち　その壱　山田　俊幸　36

新・旧刊案内20
昭和十九年の木村仙秀（承前）

青木　茂

仙秀・木村捨三は昭和十九年四月に『江戸時代商標集』を私家版で出し、その年九月に、明治二十九年から続いた集古会を休会すると謹告した集古会評議員で幹事で終刊号『集古会報』一八九号の編集兼発行人であった。『木村仙秀集』七巻がありながら、どんな人名辞典にも『著作権台帳』にもその名が録されていない人である。漸く昭和十年の会員名簿に明治十八年九月十日に青森の弘前市一番町に生まれたことのみが明らかな、世を韜晦した人物であると本誌先号に書いた（そこに載せた現住所「淀橋区東久保二丁目」は正しくは「東大久保二丁目」である。仙秀の「落々子」号以外のもうひとつの注意されていないらしい変名「大窪東二郎」もここから来ている）。

人が死んで後に残るのは何であろうか、などと青臭い論を撒き散らしていたら、私の研究室へ来る迫内祐司君が『日本古書通信』の綴りを見ていて『木村捨三さんがいました』という。それは二〇〇一年三月号の八木福次郎「思い出す人々　三」で、同誌執筆者二千人ほどからの「思い出す人々」のひとりである。全文を写すと

木村捨三氏は二回の座談会のほかに「素山の蔵票に就いて」（昭14・4）のほか七、八回原稿を頂いている。（昭38・5・28日没）

であった。ここで漸くにして私は仙秀の歿年月日を知り得たわけである。二回の座談会のうち林若吉翁を偲ぶ会（同誌昭和十三年十一・十二月号）の方は『林若樹集』（昭和五十八年、青裳堂）に載っているし、同誌に載った「『韃靼漂流記』の刊本」（昭和十五年十一月号）は『木村仙秀集　四』に載っている。もう一つの座談会古本趣味の会（昭和十三年一・二月号）